

平成 21 年度大学院入学式における学長式辞（平成 21 年 4 月 7 日）

埼玉大学の久保キャンパスは、いま桜が満開です。春爛漫の今日ここに埼玉大学大学院入学式を迎えられた修士課程、博士前期課程の 439 名、博士後期課程 64 名の皆さん、ご入学おめでとうございます。壇上においていただいております理事・副学長、各研究科長とともに、皆さんを心から歓迎いたします。

とくに、留学生の皆さんと、職に就きながら学位取得を目指しておられるいわゆる社会人大学院生の皆さんにつきましては、さまざまな困難な条件を抱えながら本学大学院で研究する道を選択されたことに対し、祝意と敬意を表したいと思います。

さて、21 世紀に入って 8 年が経過し、日本でも知識基盤社会という言葉が普通に使われるようになってきました。大学を始めとする研究機関はもとより、社会のあらゆる活動現場で、高度な専門的・先端的知識と高い研究能力を有する人が大きな役割を果たす、そういうことが期待されてきております。かつては、皆さんのように、学部で学術の基礎を学んだ上に、大学院に進んで最先端の研究に携わるといような人は、浮世離れした理解不可能な変人と見られがちでしたが、それが大きく変わってきたと言えるでしょう。理由ははっきりしています。学術が、現実を認識するものから、現実を変化させるもの、そして新たな現実を創出する力を持つものへと、その性格を変化させ、進化してきたからです。

いま、「百年に一度」といわれる深刻な経済危機のもと、どの国も、どの社会も、世界的な不況からの脱出を図る際に、地球環境劣化、人口増加などの地球社会が直面している問題、格差や医療や介護など生活現場が直面している問題、それらを同時に解決することが迫られています。そういう歴史的な転換期に立って、皆さんは、学術研究に寄せられる期待の大きさをヒシヒシと感じていることでしょう。

皆さんは今、研究テーマをどうするか思案されているところかと思います。その際にもっとも大事なことは、学問内在的に、Science for Science、科学の発展という点から見て何ができるかということを考えることですが、同時に、先ほど述べたことから、Science for Society、社会のために何ができるかということも考えてみてください。

このことは、脳科学の分野で現在活躍中の茂木健一郎さんの言葉を借りますと、科学と社会のダイナミズム、生活現場のダイナミズムとの間に「思考の補助線」を引くということになります。茂木さんの『思考の補助線』（筑摩新書）という本の扉に書かれていますように、「幾何学の問題で、たった一つの補助線を引くことが解決への道筋をひらくように、『思考の補助線』を引くことで、一見無関係なものごとの間に脈絡が付き、そこに気づかなかった風景が見えてくる」のです。虚学の効用という言い方がありますが、哲学のように、現実社会と直接に関係しないように見える学問こそ、このような「思考の補助線」を意識的に引く意味が大きいと言えるでしょう。

ところで、私はいま、社会のために何ができるかを自問することが大事だと言いまし

たが、その点についてもう少し突っ込んでお話ししておく必要があります。というのは、社会のために何ができると問うことの裏には、社会のために何をしてはならないかを問うことも当然含意されているからです。科学技術の発達史を考えますと、後者こそ、「科学者の社会的責任」として論じられてきた問題であることを認識しなければなりません。

そこで、ごく大雑把に科学の歴史を振り返りますと、近代科学が誕生した17世紀においては、自然科学も、人文、社会科学も、価値の問題を知の営みから分離して、純粋に客観的な立場から「あるもの」を認識し、原理原則や法則を明らかにすることを目指すものでした。しかし、その後、とくに19世紀・20世紀になると、科学技術は現に「あるもの」を変える力をもつものとして発展し、自然と人類社会に大きな影響を与えてきました。実際、医療と公衆衛生、医学の進歩がもたらした難病克服、人間の寿命延長、物質的豊かさに支えられた便利で快適な生活等々、科学技術の発達が人類社会にもたらした恩恵は、計り知れないものがあります。しかし、反面、科学技術は、その発展によって人々に恐怖や不安を抱かせる側面も出てきました。広島、長崎に投下された原子爆弾は、20世紀初頭の科学の成果である相対性理論、量子理論に基づく兵器です。また、科学と技術の発達が可能にした人類社会の豊かな社会化、便利な社会化は、環境汚染や資源の枯渇といった問題を引き起こし、人々の不安をもたらすようになってきました。そして21世紀の今日、科学技術は、あるものを認識する段階、あるものを変化させる段階から、これまでなかったものを意図的に創造できる段階に入ってきました。その典型は生命科学であり、生命の仕組みの解明と操作技術の開発が進んでいます。ゲノム科学から遺伝子操作技術、生殖発生生物学から胚操作技術、脳科学から高次脳解析技術が発展しており、いずれも人間存在の根底に係わる問題を提起しています。そのことから科学・学問そのものに限界を設けるべきではないか、という論議さえ出ています。科学技術は価値の問題に関係しない中立的・客観的なものである、という17世紀的な想定はもはや成り立たなくなっているのです。

同じことは、社会科学の領域でも、言えることです。一つだけ例を挙げましょう。金融工学です。金融工学は金融経済学に新風を吹き込みましたが、金融工学を利用して作り出された金融商品は、経済を攪乱させることにもなりました。今日の世界的な経済危機の契機となったサブプライムローン問題は、その象徴です。

以上私が述べてきたことを噛みしめながら、皆さんは研究テーマを明確にしていってほしいと思います。これについて、昨年、ノーベル物理学賞を受賞された益川敏英さんは、ご自分の大学院時代を回想して、次のように述べていらっしゃいます。

「学問研究の発展にはフェーズ（段階）がありますので、幅広く調べて今何が一番重要かを知る時期もあるだろうし、深く掘り下げなければならない時期もあります。だから、・・・「中略」・・・はじめから、ここに決めた、と絞るべきではないと僕は思っています。」

皆さんの中には、すでに研究テーマを決めている人もいますが、改めて可能な限り視野を広くし、社会的意味を含めて何が今格闘すべき重要な問題かを考えていたいただきたいと思うのです。

もちろん、自分が専攻する専門分野に閉じこもってはいは、視野狭窄になってしまいます。専門分野をこえ、自然科学、人文、社会科学の垣根も越えて、考えることが必要になります。

しかし、自己努力には限界があることも事実でしょう。そこで、大事になってくるのは、他者の声を聞き、議論することです。私は、最近、埼玉大学で開催されたある学会の大会の懇親会に参加し、なるほどと感じたことがあります。この学会は、意見交換、質疑応答が学問の発展の上で非常に重要な過程であると位置づけていまして、討論会という名称で、大会を行っているというのです。専門分野のなかでさえ、そういう姿勢が大事なのです。ましてや、専門分野を超えた俯瞰的な認識が必要な場合は、異質な人、いろいろな院生・教員との議論が非常に重要であり、効果的です。私は、専門分野内だけでなく、専門分野をまたがって自由に討論できる雰囲気、今日の学術研究にとってとても大事だと思います。ともあれ、こうしてテーマが決まれば、皆さんの研究はいよいよ益川さんのいう深掘りの段階にはいるのです。

以上、私は主として博士論文を書こうとしている院生諸君を念頭に置いて、話しました。しかし、今いいましたことは、修士論文を書こうとしている院生諸君にも該当すると私は考えています。ただし、修士課程、博士前期課程の院生諸君は、研究の経験も少なく、また修士論文の執筆期間も限られていますので、テーマが余り大きすぎると、破綻するおそれがあります。野心的な大きなテーマを頭に描き、その一部となる1ブロックを完成させるつもりで、テーマはリアルに選定してください。指導教員の先生がその相談に応じてくれるでしょう。

皆さんのなかには、将来、研究者の道に進みたいと希望している人もおられるでしょう。また、そうではなくて、学位を取るとすぐ社会に出て活動したいと考えている人もいるでしょう。しかし、どこに行っても皆さんは、研究を継続するつもりで大きなテーマに挑戦し、そのための第一歩をこの埼玉大学大学院で踏み出してください。

最後に、ロマン・ロランが『ジャン・クリストフ』の第10巻の「序」に書いた檄を紹介したいと思います。

「今日の人々よ、若き人々よ、此度は汝らの番である！我々の身体を踏臺となして、前方へすすめよ。吾々よりも、さらに偉大でさらに幸福であれよ。」（豊島譽志雄訳）

これをもって私の式辞を終わります。

皆さん、埼玉大学大学院へのご入学、おめでとうございます。

平成21年4月7日

埼玉大学長 上井喜彦